

朗 読 文

それは、今年の春先で、まだ、朝晩は冬の寒さが残っているころのことでありました。ある朝、いつも乗り降りしている電車の駅に向かって歩いていきますと、途中のちよつとした広場に、四つか、五つ位の男の子供が二、三人遊んでいました。私が、そのそばを通り過ぎようとしていますと、そのうちの一人が私の前に来て、私の顔を見上げながら、「おじさん、寒いね」と申します。私も思わず、「寒いね、ぼっちゃん」と答えて通り過ぎました。私は、思いがけぬ、この幼子の一言で心の底まであたためられ、明るい気分でもっと違った楽しい歩みを進めました。

それから幾日か経って、そのことも、もう記憶から薄らぎかけたころのある夕方、電車を降りて家に向かって歩いてくると、前に子供たちが跳びはねて遊んでいた広場は、すっかり雪に埋もれていました。ただその広場の片端に、一人だけ通れるような足跡が続いています。私はその足跡を一足一足歩いていきますと、後ろに人の気配がして、「細い道だね」と言うかわい子供の声がします。このあいだの朝、声をかけられた男の子ではないかと思つて振り返ってみると、その幼子はもうけろつとして、私などにはかまわず歩いていきます。もう返事のしようもありません。私は、道の悪さも忘れ、清々しい気持ちになつて家に帰り着きました。「おじさん、寒いね」と言い、「細い道だね」と言つた、その言葉は、簡単ではありませんが、その簡単な一語一語が、いかにもよく、その時の私の実感を突いています。おそらくこの幼子は、幼子に特有な直感の鋭さから、寒そうな一人の通行人を見かけて、「おじさん、寒いね」と言い、細い道に行き悩んでいる一人の通行人に追いついて、「細い道だね」と何心なく言つたにすぎないのでしよう。しかし、その見たままの真実を、そのままに、何のためらいもなく見知らぬ通行人に話しかけた幼子らしい人なつっこさが、私の心をあたため、明るくしてくれたのでしよう。